



イブン・ハルドゥーン自伝6

訳・註：中町 信孝
橋爪 烈
原山 隆広
吉村 武典
註：佐藤健太郎

凡例

1 本稿は、『イスラーム地域研究ジャーナル』に連載中の以下の訳稿の続編である。

柳谷あゆみ・阿久津正幸・中町信孝・橋爪烈・原山隆広・吉村武典・高野太輔・佐藤健太郎・五十嵐大介・湯川武・茂木明石・中村妙子訳註「イブン・ハルドゥーン自伝1―5」『イスラーム地域研究ジャーナル』1―5、二〇〇九―二〇一三年、四五―五八、三五―五六、四七―七二、六五―九八、七七一―〇二頁（以下、「イブン・ハルドゥーン自伝」と略記）

2 翻訳の底本は、以下のイブン・ターウイトによる校訂版を用いた。

Ibn Khaldūn, *al-Ta'rif bi-Ibn Khaldūn wa rihlat-hu ghurban wa sharqun*, ed. Muhammad ibn Tawfī al-Tanjī, Cairo: Maṭba'at Lajnat al-Taif wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1951 (以下、*al-Ta'rif*と略記)

また、翻訳にあたっては以下のフランス語訳を適宜参照した。

Ibn Khaldūn, *Le Livre des exemples. T.1 Autobiographie. Muqaddima*, tr. Abdesselam Cheddadi, Paris: Gallimard, 2002 (以下、*Autobiographie*と略記)

3 イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』および彼の史書『省察すべき実例の書』は、彼の自伝を読み解くうえで参考になるところが多い。主に使用したのは、以下の校訂版および日本語訳である。

Ibn Khaldūn, *Tarīkh Ibn Khaldūn al-musammā bi-Kitāb al-'Ibar*, 7 vols., Beirut, 1971 (ブーラーク版のリプリント。以下、*al-'Ibar*と略記)

Prologomènes d'Ebn Khaldoun: texte arabe publié d'après les manuscrits de la Bibliothèque impériale, ed. M. Quatremère, Paris, 1858 (以下、*Prologomènes*と略記)

イブン・ハルドゥーン著、森本公誠訳『歴史序説』全四巻、東京：岩波書店（岩波文庫）、二〇〇二年（以下、『歴史序説』と略記）

4 訳文と原文の対照がしやすいよう、訳文中に「p.002」などとして校訂版のページの切れ目を示した。

5 年代は、訳文ではアラビア語原文のヒジュラ暦表記を西暦に換算した上で、ヒジュラ暦／西暦の形式で記した。一方、註では必要な場合を除いて西暦のみ記した。ヒジュラ暦を西暦に換算する際、年代を決定しがたい場合には「六八五／二二八六―七」とした。

6 訳文中の括弧のうち、「」は訳者による語句の補足、（ ）は簡単な語彙の説明や言い換えである。また、『』は書名を示す。【】は訳註者が付け加えた小見出しである。詩や長文にわたる引用は、一段下げて記した。

7 アラビア語のカナ表記は大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、二〇〇二年の方式に拠った。

アブドウルワード朝に対抗して、マグリブの支配者スルターン・アブドウルアズィーズに協力する(承前)

【マグリブ亡命後のイブン・ハテীবに宛てた書簡】

神に讃えあれ。神によってのほかいかなる力もなく、神の定め給うこと
にかなる異論もありません。

閣下、私にとつての永遠なるすばらしき宝よ、我が手が頼る固き絆よ。
あなたに、主人のもとに参上した時のような挨拶を、従うべき王に服従し
た時のような挨拶を送りましょう。いや、むしろ、待ちわびる者が悪い焦
がれる相手に出会った時のような挨拶を、夜通し旅してきた者が曙光に出
会った時のような挨拶を捧げましょう。あなたも良くご存知のとおり、私
の言うことに間違いはありません。私はあなたを愛しております。あなた
の資質の高さも存じ上げております。そしてあなたを極限まで尊び讃え、
あなたの美徳を遙か彼方まで称賛します。それは私にとつては当たり前の
こと、当然の習いでございます。神は知り給う、神こそ最良の証人です。
あなたもご存じのことについては、私にとつては終始変わりなく、証
人がいようとまいと変わることはない誓いを立てます。あなたは [[p.141]]
我が心中を誰よりもよく知り、我が内心に秘められたものの最良の証人
です。

もし私が「あの連中の言うように」そのようであったとしても、あなた
はしかるべきことをして下さり、親切な態度を取り、ご尽力で幸運をお引
き寄せ下さり——もし運命がそれを準備するならば——、あなたの権威と
王朝からの地位で私を厚遇して下さいはすです。そうすれば人々の心の
覆いを和らげ、心中の敵意をそっと引き抜かれたことでしょう。どうか敵
愾心を起こしたり、思い込みを真に受けたりしないで下さい。キジバト [[p.142]]
「のように誠実な私」の胸にほんの小さな穀粒「のごとき悪意」が付いてい
たとしても、それであなたの誠実さを悪く言ったり、あなたからのかつて
のご恩を軽んじられたりすることなどありませんように。それは終末の日
まで、心の中に隠されたものでありますように。

神かけて、また、誓いが立てられるものすべてにかけて、我が友にして
あなたの友でもあり、私とあなたにとつての親友——かくあれかし——、
権威ある優れた賢者である、アブー・アブドゥッラー・シャクーリー [[p.143]]——

神よ、彼に力を与え給え——こそが、私の心の奥底を知っております。私
はあなたと彼との関係を誰よりもよく知っておりますので、「彼は」心を許
して何でも打ち明けられる人です。 [[p.142]] トレムセンの支配者(ザイヤ
ン朝君主アブー・ハンムー)と別れ、彼の権力が消滅した時に私に合った
こと、すなわちあなたのもとへ旅立つために万端整え、あなたがいる「ア
ンダルス」岸への渡航に向けて海辺の町に急ぎ向かったことを、彼は
知っています。「ところが」私はその町で疑いの目にさらされて根も葉もな
いことを言われ、ついには身に覚えのない、企んだこともないようなこと
で訴えられるという災難に巻き込まれてしまいました。我らが主人、カリ
フ様(マリーン朝君主アブドウルアズィーズ)のご寛恕とご厚意、確固た
るご見識がなければ、私はいにしへの死者たちの列に加わっていたでし
ょう [[p.143]]。これもすべてあなたに会うことを望んでのこと、あなたの友誼を信
じてのこと。ですからどうか、私について憶測などなさらず、ありもしな
いことを信じないで下さい。というのもご存じのとおり私は、友情にあふ
れ純真で、誠実で裏表がなく、最もよく約束を守り、最もよく秘密を守り、
同胞の重みと優れた人の美徳とを最もよく知る人間だからです。

わけあって、私のトレムセンからの便りは遅れました。それは私を客と
して遇して下さいの方(マリーン朝君主アブドウルアズィーズ)が、自分
以外に宛てた手紙を、とりわけあなたの手紙を、疑っているのでは
ないかと感じたからです。なにしろ、二つの王朝の間には、団結し助け合
い手を結んできたという過去のいきさつがあるからです [[p.143]]。その間も、私
のもとに頻繁に使者が訪れ、あなたとスルターン(ナスル朝君主ムハンマ
ド五世)——神が彼ともにあられますように——が私のはつきりとしな
い状況について明らかにしようとして下さっていることを知らせてく
れました。そこで私は、あなたがお望みであろうことは余すところなく、
ペールをはいで、きちんとお伝えしてきました。そして我らが主人、カリ
フ様が私を瀕死の状態から救い、私の両腕をとって引き上げて下さってか
ら、お分かりのとおり、思いを巡らすことさえできないような雑事の急
流の中で泳ぎ続けています。 [[p.143]]

このような遠隔の地で働いている私のもとに、あなたがマグリブにい
らっしゃるとの知らせが舞い込みましたが、まだ私が王都(トレムセン)
へ送った使いの者が到着する前のことであり、不確かであいまいなもの
でした。それに、「あなたが」旅の杖を置いた場所も落ち着かれる所も判りま

せんでしたので、それがはっきりとするまで手紙を書くことはしませんでした。そして私は、うるわしい慣わしと栄えある形式に則った尊きあなたの手紙によって、運命がもたらしたあなたの思いもかけないような境遇の変化を知ったのです。私は、かつてともに語らうたびに遠かろうと思っていた、あなたの叶いがたき望みが、ついに叶ったことに驚きました。あなたが日々という悍馬を飼い慣らし、栄光の頂きに登り詰め、この世のすべてを導き、人々をしのいで大空のもと遙か彼方の地平までも手にした後にあって、最良の局面において、最善の方策でもって、国事の厄介ごとから抜け出せたことについて、あなたのために神を讃えました。「その方策とは」現世と来世において結末を讃えられるものであり、家族や子ども、財産や事績などの遺されたものについても良い結果を得られるようなものでした。ご多幸あれ、あなたの熱望する魂は、最も遠い望みを獲得し、さらには神の御許にあるものをも望んだのです。私は証言します、「世間から」認められ受け容れられ、あらゆる望みが叶えられた時に、世事を避けて世の儂きものから手を引くように導くのは、*«وَمَا مِنْ شَيْءٍ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ»*神のお引き立てやご加護、愛以外にはありえないということ。神が何事かを望み給う時、神はその手段を容易にし給うのです。

陛下の御前に集う人々があなたを歓待し、あなたの到来に王朝が喜び震えたことは、私にまで伝わりました。かのカリフ位——神よ、それを支え給え——にあるごときお方は、誇りを追ひ求め善なるものを独占します。このことが、あなたが「陛下のもとでの」幸運を追い求め、願望を叶えようとしている時であったならば、「陛下は」あなたがいらつしやることを喜ばれ、その玉座は美しくなったものでしょうに。思うに、その願望を押しとどめ、幸運を投げ捨て、大切な者との別れをたやすくさせたこの導きが、あなたを神の御許へ逃げ込ませたのです。それはあなたの手を取って神の道に進ませ、*«جُودِيَّيْهِ»*のごとき修練の高みにまで登らせるためでした。神はもつとも正しき道に導き給います。私が思うに、「あなたの」歩みは前へ進められ、*«p.145»*眼力は真理を授けられ、階梯は次々と背後に過ぎゆき、智慧の光と稲妻を求められ、障壁がなくなつて到達の果てにある真理が明らかになるでしょう。

私の現状はと言いますと、あなたはそれに関心を持ちお知りになりたいことと思いますが、陛下の宮廷——神よ、それを高め給え——で隠れなきものです。彼への服従は一目瞭然、何事も彼の命令に基づき、彼への奉仕

に奔走しております。私は陛下に仕えてお味方をし、あらゆる人を私の助言に従わせ、統治のために人心を収攬することで、陛下の覚えめでたき地位にあると言われております。威信あるあなたが求め、好意と関心を寄せ下さる、私自身と息子たちの私的なことならについては、知らせを持つジュハイナ族のごとき者がこの手紙をあなたに届けます。私のしつけの賜物にして、私の教育の成果ですので、どうぞ安心してこの者に面会の許可を与えて下さい。私のもとにあるものとあなたのもとにあるものを伝えさせるため、心を和らげて彼に内密の話をして下さい。始まりでやめてしまわず話の結末まで彼に託して下さい。彼を信頼して何でも話して下さい。彼は秘密を守る人物ですから。*«p.146»*

我が貴きお方にして私とあなたの友、榮譽と美德に優れたる者、困難を分かち合う者、マグリブの名士、王朝の援助者、アブー・ヤフヤー・イブン・アビー・マドヤン——神よ、彼にお味方し給え——が、あなたにご子息と残してきた財産についての知らせを持ち帰ってくれることを、友人として、あなたの手の爪の切りくずが日々々に紛れてしまうことさえ惜しいと思う者として、切実に望みます。されば、その知らせをためらわず私にも伝えて下さい。このたびのあなたの「グラナダからの」出立は善きものであり、あなたの力は偉大です。あなたの事績は美しきものであり、中傷する敵など少なく取るに足りません。あなたの意図は正しく、行為は純粹です。神に味方する者には、神が味方になって下さい。

私とあなたを保護して下さいるムズニー族の長は——神がその情け深き手に報いますように——、そのようなあなたの状況をお知りになりました。それは、あなたのことを重く見て、あなたのような方の誕生を時代に感謝しておられるからです。私は彼に、あなたの徳、高邁な志、奇特な目的について教えました。それは、王朝の運営や正しい政治におけるあなたの事績が示しているものであり、届いた書簡の中や、行き交う人々すべての言葉の中で、いつまでも語り継がれるものです。私が彼にあなたからの挨拶を伝えたところ、彼はあなたに挨拶を返し、あなたのために祈願をして下さっています。

私からは、我が貴きお方、我が血肉を分けた息子にも等しい、心正しく高潔な法学者、あなたのご子息であるアブー・ハサンに挨拶を送りましょう。神が彼に力を与えますように。王朝での高き立場と貴き地位に彼が就いたという吉報が、私にもたらされました。*«p.147»*神があなたを健やかさ

の外衣と覆いですっかり包んで下さいますように。あなたに幸いにして安らかなる場を用意して下さいますように。あなたを惜しみない恩寵でお守り下さいますように。あなたに常なる恩恵とご配慮を下さいますように。すばらしき平安が特にあなたのためにありますよう。「あなたを」愛し感謝し呼びかけ待ち望む、あなたの美徳の賛同者、アブドゥッラフマーン・イブン・ハルドゥーンより。神の慈悲と恩恵がありますように。七七二年断食明けの日¹⁰ / 一三七一年四月一八日¹¹。

【イブン・ハティープがナスル朝君主ムハンマド五世に宛てた書簡】

彼（イブン・ハティープ）は「上述の」手紙とともに¹²、彼がジブラルタルに着いてマリーン朝の領内に入った時に、彼のスルターンであるアンダールの支配者、イブン・アフマルにあてて書いた手紙の写しを私のもとに送ってきた。彼はこの手紙によって、その地からイブン・アフマルに語りかけているのである。本書の目的とは異なるとしても、その珍しさと際立った素晴らしさゆえに、私はここにそれ（手紙の写し）を留めておこうと思う。こういったことは、本書のようなものには見過ごすことはできないのだ。というのも、そこには諸王朝の状況に関する詳細な情報が、さらに含まれているからである。その手紙の本文は以下のとおりである。

彼らは行ってしまった。そして泣いていた者は泣き続ける。

まぎれもなくこの者たちは、夜道を旅する者たち。

丘の間を抜けて急いできた

ラクダの背中から、舟へと。

糸の切れた真珠が坂道を転がり落ちるように

人と人との絆はばらばらになってしまった。

かつては私にも目指す目的地が

そう、目的地があったものだ。王権の所有者（神）は偉大なり。//p.148//

陛下——神があなた様のためにあり、あなた様のことをお引き受け下さいますよう——、私はあなた様に対して別れの挨拶を申し上げます。ひとたび別れ、離れてしまった後も、たやすく再会することができませんよう神に対し祈願いたします。また私はあなた様の御前においてはつきりと申し上げますが、人は運命の虜であり、選択の自由を奪われた存在であり、そ

の心や想いは揺るぎやすいものであります。またあらゆる始まりにとって終わりは不可避であります。生き別れるにせよ死に別れるにせよ別離とはいかなる二人の間にも付きまとうものであり、免れえないものであります。ゆえに、愛しあう人々の間に生じる最善の別れとは、屈託のない晴れやかな顔での別れであります。

またあなた様の下僕（イブン・ハティープ）はあなた様のご息をマグリップよりお連れいたしました。その後の私の状況をあなた様はご存じでいらつしやるでしょう。あなた様のご配慮とご厚意のおかげで、あなた様のもとでの滞在は落ち着いて安心したものとなりました。私は、あなた様の気が晴れるようならばらしいことが起こらないかいつも待ち望んでおりました。あなた様が成人なさり、ご息たちが成長なさり、あなた様が巧みに統治を行うことができるようになり、あなた様の故国に平穩無事¹³が訪れることをひたすら望んで日々を過ごしました。そうした中で、あなた様のために自分自身の目的は犠牲にしました。そして私の手によってあなた様の御世は確かなものとなりました。

私はあなた様のために勝利と栄光と努力の良き成果を得て平穩無事を導き、そして長期にわたる和平が実現しました。またアンダールにおいて反乱を起こしていたあなた様の身内の者¹⁴は消え去りました。そして私は西方边境の検分に向かい、海峡の港に近づき、マシユリクに連なる道を臨みました。//p.149//ここに至って、諸々の考えが下僕に生じ、想いの風が下僕の忍耐を揺さぶったことを陛下にお分かりいただきたく存じます。私は、自らの寿命が尽きかけていることに、「世事に」没頭してきたことの結末に、そして「齢を重ね」白髪の増えた有徳者たちの習いに、思いを巡らしました。すると、再会への望みや美しき故国や大いなる栄光や並ぶ者の少ないスルターン「の恩顧」にしがみつこうと打ち砕くような強心的状態¹⁵が私を捉えたのであります。そして私は預言者の言葉「死ぬ前に死ぬ」¹⁶に従って行動したのであります。神の援助によってのみ望みうるかくの如き心的状態が本物であるならば、足は前へと進み、神の固き絆をしっかりと握りしめることになるでしょう。たとえうまくいかず、その決意が物笑いの種になったとしても、神はその恩寵でもって我々を遇して下さいましょう。

私の行ってしまったことは望み難きものではありましたが、以下に述べる諸々の要因が私にとってそれをたやすいものとなりました。その一つは、

止むに止まれず出立いたしました。このような形でなければ出立は叶わなかったということがあります。何故ならあなた様のもとには、出立は不可能なことでありましたので。またその一つは、たとえあなた様が私の出立を許して下さったとしても、あなた様への暇乞いの場にいることはとてもできなかったということです。決して。もしそのようなことになれば、私はその前に死んでしまったことでしょう。そして人と人との間柄としては、あなた様もご存じの、私とあなた様のこの親しき間柄で十分でございます。またその一つは、私が述べ続けてきたことが真実ではないのではないかと言われておりますが、私の主張の正しさが証明されればと願っていることでもあります。またその一つは、平時であり、平穩無事が長く続き、私ごときはもはや不要となった時期に、離れ去ることといたしましたことでもあります。何故なら、このやむを得ぬ出立はそのような時でなければ軽率かつ見苦しい行いでありましたので。またその一つには、これこそ最大の要因ですが、私が、無能であつたり、あるいは病に罹つたり、あるいは故国への想い断ちがたく、この行いを全うすることができず、それが叶わない時には、憐れみ深い父が、優しく満ち足りた子のもとへ戻るがごとく、私はいつでも戻ることができる、ということ。というのも、私は戻ることが妨げるような忌むべき言葉や行為を後に残してきたのではなく、ただただご厚誼を賜るに相応しい働きと不滅の事績と美しき行為だけを残してきたからであります。私は我が師匠たちと我が故国の偉人たちと当代の人たちを凌ごうという高貴な意図をもって出立しました。あなた様を称賛し、あなた様のために祈願しながら、私にとつて最も満足できる形であつた様のもとを辞したのであります。もし神が私に余命を残して下さり、私の目的を達成させて下さったならば、私は我が子のもとへ、そして我が大地へ戻ることが望みます。それも叶わず命運尽きた時には、私は「その者の報酬はかしこくも神が引き受け給う」^⑧人物たることを望みます。

もし私の行為が正しく、適切なものであるならば、正しき人が非難を受ける謂れはありません。私の行為が愚かさや理性の劣化に基づくものであるならば、理性が混乱し四体液の調和が乱れた人もまた非難されることはありません。むしろその人は容赦され、同情され、そして慈悲を施されることでしょう。またあなた様が私の行為に対して正当な評価をお与えにならず、諸々の罪があげつらわれ、私が立ち去った後で色々な過ちが言い立

てられたとしても、あなた様は恥を知り公正に接しようとするお方であらせられますので、それを嫌い、以下に述べる私の善き行為を想起なさるでしょう。すなわち、あなた様の養育と教育、ご祖先への奉仕、あなた様の業績を永からしめたこと、ご子息に名前を付けたこと、スルターンとしてのラカブを選んだこと^⑨、正しい行いへと導いたこと、深く親しい間柄であること、であります。これらの善行の間には、財貨や秘め事についての背信も物事の差配についての虚偽も決して入り込むことはありませんでした。不名誉がそれらに関わることもなく、不足がそれらを汚さず、あなた様を恐れたりあなた様の手中にあるものを望んだりすることがそれらを妨げることもございませんでした。そして、もしこれら善行の一つ一つが、ご厚誼と親交と長く続く愛情をもたらしてくるのでなかったとしたら、どうすればそれらが人類の間に存在しえるのでしょうか。

私はすでに出立いたしました。私はあなた様のもとに財貨を遺してきたことはありません。何故ならそれは私のもとにあるものの中で最も取るに足らないものでありますので。^⑩また息子たちを遺してきたのでもありません。彼らはあなた様の家来であり、召使であり、あなた様の如きお方が望めばいくらでも奉仕させることができる者です。また妻妾たちを遺してきたのでもありません。彼女らはあなた様の家にて養われ、あなた様の屋敷にて身内として扱われておりますので。ただただ私は、あなた様の故国に——かつて私のものであつた——大事な物を遺してきております。それはあなた様です。そして、私はあなた様にあなた様を遺したのであります。それはあなた様から、私を特別にあなた様の心の中に留めていただきたいのです。この私はあなた様に対して、神への畏怖を、来るべき日のための行いを、真剣に物事に取り組まなければならない時に悦楽を求める心を御す手綱を取ることを、そして神の前で恥を知る心を遺します。その神は「お前たちの出方を御覧になる」^⑪ために、恩寵を消し去り、無効にし、その後でそれを戻して下さいました。また私はあなた様に、私が差し上げたものの代わりとして、道中の糧食、報償、援助などの中から、あなた様にとつては与えることのたやすい糧食を求めます。それは、あなた様が私に対して以下のように言って下さることです。すなわち「過つてか意図してか、汝のせいで失われてしまった我が権利^⑫について、神が汝を赦し給いますように」と。もしあなた様がその様に言って下さるのであれば、私はそれで満足でございます。

また忠告として以下のことをお知りおき下さい。すなわち、イブン・ハティープはあらゆる地方において、またすべての王のもとで名の知れた人物であることを。しかし、彼が信頼されているのも、彼が親切を受けるのも、彼のこと話に上がるのも、彼の名が誉めそやされるのも、彼がどこへでも訪問を許されるのも、あなた様の気高さと度量と思慮分別のお蔭なのであります。イブン・ハティープはただただ、あなた様の故国においてこそ、空に垂れ込め、「雨を降らせた後で」掻き消え、香気を放つ花々と光輝く美しいものを残し置いた、慈悲の雲でありました。またあなた様とともにいる際の彼の姿は、乳母の如き姿であり、政事や幸いなる御差配に乳を含ませ、平安と安寧の寢床にあなた様を横たえ、健やかさの毛布をあなた様に掛け、そして乳や汚れを洗いに風呂場へ行き、戻ってくるのであります。その際、赤子がやすやすと眠っているのを見ると、それをよしとし、あるいは赤子が目覚めていたら、*[[p.152]]*赤子が乳を離すまで面倒をみるのであります。

さて、私は長々と述べてきたことを以下の確かな誓いによって封をすることといたします。「げに、私はあなた様のために、来世と現世についての忠告を十分に差し上げました。あなた様のものを離れたのは、私にはもうこれ以上何もして差し上げることが無くなったからにはかなりません」。これに異議を唱える者がいるとすれば、その者は私に対してだけでなく、あなた様に対しても不正を働く者であります。神はあなた様を正しく導き給いますでしょうし、あなた様のことをお引き受け下さることであります。そして私はこの様に申し上げます。「私は航海にあります、いつでもあなた様の心の中におります」と。

この手紙の写しはこれまでである。またその写しに、以下の詩句が数行添えられていた。

汝を愛しく想う者の臉から涙の雲は雨をもたらす

汝のもとから吹いてくる東風を嗅いだ折りに

我が楽園よ、如何にして汝を忘れ得ようか

心は、生まれる前から汝への愛に狂わされていたというのに

さらに言ってみよ、心がどうなってしまうか

汝の傍らにて睦み合う心地良さに魂が酔いしれた後で

あらゆる人を保護する安全な汝という館を捨てたことはなかった
汝の主の館（カアバ）へ向かう時まで

我が弁解を受け入れよ、さすれば私は新奇な言葉を並べなくてすむ

汝の習いである美德と満足とともに、汝が永続せんことを！

私を失ったと言って汝が悲しみを訴えるたびに、

汝の悲しみ故の我が悲しみと孤独感を何処に向ければよいのか

我が息子は汝の翼の下に、我が巢は汝の大樹の中に、

我が墓は汝の大地にあり

私に別れをもたらず時よ

お前と戦う備えがあればよかったものを *[[p.153]]*

時の移ろいが私に困難を負わせ、

とうとう、最大の困難である別れをお前もたらした

その写しの最後には、私に向けて次のように書かれてあった。

神のお蔭をもちまして、この手紙を書くことができました。この手紙は完全性の持ち主たちには何ら縁のない世迷言の類ですが、神は、私にも貴兄にもよりよい恩寵を施すお方であります。神が、我々をその御許へと戻し、また神への我々の托身を純粹なものとし、神の御前にあるものを我らが望むようにさせ給いますように。

またその写しには、別の紙が折り畳まれて添えてあった。その内容は以下の通りである。

神が貴兄を嘉し給いますように。この一連の出来事の間には本を執筆しました。ちょうど我が子^⑤がそれをもたらしたので、貴兄に読んでいただきたいと思えます。我が子は、貴兄にふさわしい言葉でもってご挨拶申しております。我が子はこの高貴なる地位のお方（マリーン朝君主アブドゥルアズィーズ）の恩寵により莫大な富を賜り、惜しみなく厚遇を与えられ、俸給を賜る榮に浴し、護衛の騎兵たちをつけていただきました。神に讃えあれ。

これにて引用を終わる。

【マリーン朝君主アブドゥルアズィーズの中央マグリブ平定に協力する】

私はビスクラ滞在を続けていた。その当時、中央マグリブはスルターンのアブドゥルアズィーズのもとへの帰参を妨げるような争乱によって無秩序な状態になっていた。すなわちハムザ・イブン・アリー・イブン・ラーシドはマグラーワ族の地におり、ワズィールのウマル・イブン・マスウードは軍隊を率いて、タージャフムーミトの砦²³において彼（ハムザ）を攻囲していた。またアブドゥルワード家のアブー・ザイヤーンはフサイン族の地にいた。フサイン族はアブー・ザイヤーンを守り、彼の支配に服していた。

その後、スルターンはワズィールのウマル・イブン・マスウードがハムザとその一党の件について成果を上げないことに苛立ち、彼を非難した。スルターンはウマルをトレムセンに召喚し、彼を捕え、枷をはめてフェズに送り、その地に監禁した。スルターンはワズィールのアブー・バクル・イブン・ガーズィー²⁴率いる軍団を準備した。アブー・バクルはハムザを襲撃し、包囲した。そこでハムザは砦から逃げ出し、ミルヤーナ²⁵に差し掛かって川を渡ろうとしたところ、その地の代官が彼についての知らせを受けた。p.151彼（ハムザ）は捕えられ、仲間の一団とともにワズィールのもとに護送された。ワズィールは彼らの首を打ち、争乱を起こす輩に対する警告と非難として、彼らの死体を晒しものとした。

その後、スルターンはワズィールにフサイン族とアブー・ザイヤーンに対する進軍を命じた。そこでワズィールは軍を率いて出立し、ズグバ族²⁶のアラブ諸族に対し、戦いに参加するよう呼び掛けた。ワズィールは彼らを取り込み、フサイン族を襲撃した。フサイン族はティータリー山²⁷に立て籠もり、ワズィールは軍隊とズグバ諸族の者たちを伴って、ティータリー山の丘陵側（北側）に軍営を張った。そして彼らの喉首を締め上げたのである。またスルターンはリヤーフ族に属するダーウッド族²⁸の長たちに手紙を書き、進軍してティータリー山を南側から包囲するよう命じた。またビスクラの支配者アフマド・イブン・ムズニー²⁹にも手紙を書き、ダーウッド族に物資を与えて支援するよう命じた。

またスルターンは私にも手紙を書き、ダーウッド族とともに、ティータリー山の攻囲に向かうよう命じた。ダーウッド族は私のもとに集結し、私は「七」七四／一二二七二年の初頭に彼らとともに進軍した。そしてカトファ³⁰の地に軍営を張った。私はダーウッド族の一隊を率いてティータリー山を攻囲中のワズィールの陣地へ行った。ワズィールはダーウッド族の軍務の範囲

を定め、彼らと報酬について取り決めた。そして我々はカトファの地にいるダーウッド諸族のもとへ戻ったのである。そこでダーウッド族はティータリー山への攻囲を強め、フサイン族をそのラクダや馬とともに山の上の方へと追いやった。それゆえラクダや馬が死んでしまい、四方が囲まれて、彼らの力は衰えた。フサイン族の一部は密かに降伏を申し出る使者を遣わし、ゆえに彼らは互いに疑心暗鬼になった。そして夜に、フサイン族は山から散り散りに逃げ、アブー・ザイヤーンもp.152彼らとともに砂漠へと落ちのびた。そして、ワズィールはフサイン族が残したもの共々その山を占領した。フサイン族は、砂漠の中の彼らにとって安全な場所に辿りついた時、アブー・ザイヤーンとの契約を破棄した。そこで、アブー・ザイヤーンはガンマラ族³¹の山に逃げ込んだ。一方、フサイン族の有力者たちはトレムセンのスルターンのアブドゥルアズィーズのもとへ赴き、再び彼に服した。そこでスルターンは彼らの帰順を受け入れ、彼らをその故地へと戻した。またワズィールは、スルターンの命として、私にヤフヤー・イブン・アリー・イブン・シバーウ一族³²とともに進軍し、ガンマラ族の山にいるアブー・ザイヤーンを捕えるよう命じた。ちょうどガンマラ族が彼らの支配下であったので、服従の義務を完遂せよというのである。そこで、我々はその目的のために進軍した。しかし、ガンマラ族のもとにアブー・ザイヤーンはいなかった。ガンマラ族の者たちは、アブー・ザイヤーンが彼らのもとを發ち、砂漠の町ワールカラ³³の地に行き、その支配者アブー・バクル・イブン・スライマーンのもとに身を寄せたと告げた。そこで我々はガンマラ族の山から立ち去った。ヤフヤー・イブン・アリー一族は彼らの同朋のもとへ向かい、私はビスクラにいる家族のもとへ戻った。そして私はスルターンに一部始終を報告し、スルターンからの命令を待った。やがてスルターンからのお召しの知らせが届いたので、彼のもとへ向けて出立した。

余録³⁴

【イブン・ハテイーブの起草になるナスル朝からハフス朝への書簡】

ワズィール・イブン・ハテイーブは、韻文と散文、諸知識と文芸³⁵において神の奇跡のうちの一つであった。何者も彼の高みと競うことはなく、それら諸学において、何者も彼の如く神の導きを受けることもない。

イブン・ハテイーブが、自らの仕えるスルターン（ナスル朝君主ムハンマ

ド五世)のために起草してチュニスのスルターン(ハフス朝君主アブー・イスハーク)に宛てた返札の書簡がある。アブー・イスハークからムハンマドへ馬や奴隷といった贈り物を伴って書簡が届いたので、以下のような返信を出したのである。⁸⁸ //p.156//

カリフ位にあるお方。その揺るぎなき卓越性という教義をめぐって異論の余地はなく、そのよく知られた誇りや広く流布した栄光という建物が先達の定めた土台の上、何にもよらずに立ち、その不可侵な権利や負うべき義務は必ず認められるものであり、それに期待を抱く者たちにとって懐の深さも庇護の翼も十分なものであります。我々がそのそびえ立つ威厳や高貴なる紐帯と交わることは、まるで水が極上の葡萄酒と混じり合うようなものであり、⁸⁹我々がその高貴なる栄光や普遍なる美德を称賛することは、まるで雲が花々の咲き誇る庭園に雨を降らせた後に、その花園が馥郁たる香りを放つが如くです。上を仰ぎ見れば、それが永遠に存在し高くあり続けるよう我々の祈願はいと高き天の門を叩くまでに達するでしょう。また、その偉大なるお方のために我々が義務を十分に果たし、普遍なる恩恵を我々が十分に得ようと望むことたるや、限りなく、描き切ることも出来ません。たとえ真理と公正(神)が、このたいそうな望みを果たし得ないことを赦したとしても。

我々が尊敬を示すカリフ位にあるお方、我々が自ら望むものにより心悩ました際に選ぶお方、愛しい者を近くにと求め憎らしい者を遠くにと求める際、我々が自らを犠牲に捧げると誓いかつ卓越しているとみなすお方。⁹⁰ p.157//しかじかの⁹¹シャイフ・アブー・ムハンマド・アブドゥルワーヒド・イブン・アビー・ハフスの息子である、しかじかのアミール・アブー・ザカリヤの息子である、しかじかのスルターン・アブー・イスハークの息子である、しかじかのスルターン・アブー・ザカリヤの息子である、しかじかのスルターン・アブー・バクルの息子である、しかじかのスルターン・アブー・イスハークに宛てて。⁹² 神よ彼にご長寿を賜りますように。彼が日々の糧や安全について、イブラーヒーム⁹³と同じ地位にありますように。彼に恩恵の果実が何時いかなる場合でも変わらず集まってくるように。周りの人々を略奪する輩から、神が彼を守り助けて下さいますように。

どんな力よりもアブー・イスハークの高き力を尊び、率先して彼の大義

を受け入れる者。韻文と散文でその事績が永久に語り継がれる彼の高貴さを、まるで香り高き庭園が雨を賞賛するように褒め称える者。帳に守られて清らかなまに、まっすぐで揺らがぬ栄光に包まれて彼が長生きすることを神に祈る者。諸々の目標を達成し諸々のおこないを完成した後に、神が彼の人生に封をして終わらせ御側に召して終の住処⁹⁴を与えて下さるよう神に祈る者。我らが主人にしてムスリム達の長、アブー・ワリード・イスマイール・イブン・ファラジュ・イブン・ナスルの息子である、我らが主人にしてムスリム達の長、アブー・ハッジャージュ・ユースフの息子である、神の下僕、神により満ち足りた者、ムスリム達の長、ムハンマド⁹⁵より。//p.158//

早朝にそよぐ風が花々のおしゃべりを運ぶような、カモミールやスイセンが川の絶えざる流れから聞いた話を伝え語らうような、昼の花嫁(太陽)の顔が婚礼のお披露目の座の上に現れるような素晴らしい平安がありますように。それは、血が高貴で、力強い隣人がいるあなた様のカリフ位にこそふさわしいものです。神の慈悲と恩恵がありますように。

神に讃えあれ。かのお方はその究極の叡智を人間の知性から隠し給い、それゆえ推し量ることが出来ません。また、魂を——伝承にて述べられるが如く——「集められた軍隊⁹⁶」となし給い、それは同朋達に憧れを抱きます。また神は人を遣わして、彼に近しい偉大な者達からなるこの共同体を助けるお方です。そこで遣わされるのは、抑えがたい人々の欲望を飼いならし、人々が真の目的を願う前に道を開いてやり、人々が神への愛という服を着古した際に、神の満足を望んで、それを新たにしよう気を配る者です。また神は王者にして真理。ほどこけてしまった絆をそのお力で結びつけるお方にして、困窮した心をそのお力で富ませ給うお方。子に乳をせがまれた雌ラクダのように恩寵をよく垂れ給い、朽ち果てた希望の骨を墓から生き返らせ給い、絶望した心を天国の天使達のように清らかにし給うかのお方に讃えあれ。//p.159//

我らが長にして我らが主人たる、神の使徒ムハンマドに祝福と平安がありますように。ムハンマドは、光を求める者にとって神の導きの灯火にして灯籠であり、地上から埃や塵を払い清める者であり、人々の間から神により選ばれし者であり、セト⁹⁷やエリヤ⁹⁸といった高貴なる使徒達の長であり、使徒のいない時代に、すなわち神の助けを得たものの結局一切の希望を失った後に、彼らのやり方を守る者としてやって来た者であり、牙を

むき出しにし「獲物を」引き裂いた猛獣をその住処へと追い立てる者であり、偶像を「引き倒して」埃まみれにし教会の鐘を黙らせる者であります。

神がムハンマドの家族と教友と親族と仲間を嘉し給いますように。彼らは高貴なる聖法の守護者であり番人であり、聖法の樹「に咲く花」に授粉する者であり、聖法のための戦いが燃え上がった際には戦場の獅子であり、暗闇のなかの修道士達であります。その修道士達は漆黒なる夜の孤独のなかですべてを聴きすべてを知り給う神との対話を聖法に親しむことで我がものとし、神に赦しを請い求める際には、聖法の香しき息吹をもって曙のそよ風を広めるのです。

いと高くして神に援助を求めあなた様のカリフ位のために、神へと祈願いたします。力強い神の手がその恩恵の杯から水を注いで下さいますように。また神による庇護が、カリフ位が尊敬され守られることを保証して下さいますように。天使と聖霊の助けを得た戦勝の報せがカリフ位の近くに座る方々にとつての香草でありますように。代々伝えられてきた偉業の徴が、カリフ位の紙葉に何行も書きつけられますように。この世の存在という広場が、*al-Diwan* カリフ位の寛大さと勇敢さという駿馬が駆けめぐる馬場で在りますように。力はカリフ位の天幕から、正義はカリフ位の天秤から発するものでありますように。国を略奪し食いちぎろうと敵が騒いだり、身の程知らずどもが欲を貪った際、神に支えられたるカリフ位の掌が偉大なる勝利の剣の柄を握り締めますように。カリフ位の「支配地域に在る」リヤーフ族の風が吹き荒れ、その地のミルダース族が反乱を起こすことがあつても。

さて、我々はあなた様へと書簡を書き綴っております。神があなた様に勝利の軍団から援助を配して下さいますように。その援助とは、神によって助けられたる旗を持つあなた様の王権に對する服従へと、その旗に氣付いた全人類の首を垂れさせるのです。また神意の徴のうちから一つの徴を神があなた様に届け給いますように。その徴は杖で岩を叩いた人のように堅き岩をその杖で叩き、神意を水の如くほとばしり出させます。グラナダ——神がかの地を守り給え——のアルハンブラ宮から我々は書き綴っております。「グラナダでは」すべてをお知りになる王(神)の配慮を得て、高貴なる天使達の使節団がイスラームの日々の宴席と婚禮の祝宴へと集います。一方、互いに相争うという疫病は、*al-Diwan* 神に援助されたる信仰への敵に対して、アムワースの年のような惨事を繰り返します。

神に再び讃えあれ。神は恩寵を見失ってさまよう人々をつかまえ、寛大さと気前よさという贈り物を惜しみなく注ぎ給い、幸運が逃げ失せたり希望が叶わなかつたりしないよう守り給います。あなた様のカリフ位、それは人々の集う場所です。庭園がそのバラとミルテを自慢するように、万物がその栄光の素晴らしさを誇ります。美德の灯はその火種から取られます。ここでは、ダツハークとアツパス「の如き信頼できる伝承者」から伝えられた物珍しくも真正な伝承として、役立つ話が弁舌巧みに語られます。これに加え、神があなた様を、既になさっていることですが、より上の段階へ引き上げ給いますように。裸足の者とサンダルを履く者(全人類)にあなた様の名譽の証拠について話させ給いますように。

さて、あなた様の書簡が我々に届きました。神の我々に対する恩恵ゆえに、我々はこの書簡を邪視を防ぐ魔除けと看做しました。また、その書簡を、他の装飾品など必要としない首飾りとして神の恩寵という衣服の上に掛けました。*al-Diwan* また、その書簡を、矢筒の口から出た、疑念も虚偽も残らない素晴らしき筆致の徴と呼びました。時間という債権者に負債を帳消しにしてもらえるような親愛の証書をその中に読みました。また我々は素晴らしい文体をその書簡に見出しました。その文体の御前では、腰紐を巻いたかのような節のある葦ペンが歩きまわり、絢爛たる刺繍を施して仕えるが如くでした。葦ペンはその意味、すなわち創造について問われ、「我ら(アッラー)が特に新しく創つておいたもの、この女たちは」というクルアーンの言葉を「言いました。吉兆の鳥とバーンの樹を描写し、明瞭な語り方をする誇り高いアラブの出自をもつ書簡よ、ようこそ。この書簡は信頼をもたらずもです。その部族はといえば、キナーナ族にさかのぼります。口を大きくすることはなくとも明瞭なアラビア語で話します。そのインクの色は夜のように黒くとも、書簡の顔は喜びで輝いています。その書箱の上に封として押された、季節外れの早生のバラのような印章は、まるでその刻印から麝香の香りが湧き立つが如くです。ペンから生まれたものは、神に属します。ペンはあなた様の衣装を飾り立て、命の泉から取られたインク壺の滴で、喉の渴きを癒してくれます。万物の中に永遠の栄光を保つカリフ位に範をとつて、惜しみない寛大さを示します。ゆえにペンは修辭術の秘密と精髓を惜しまず、気前よくも遂にはその若返りの水を許し与えます。剣がその勇敢さを示すと、ペンもまた抑えきれずに並外れた好意の表情と理解の心を示します。そしてペンは歓迎の挨拶を受けなが

ら、広大な紙の上を、頭（ペン先）を下にして歩き廻ります。//p.163//

ペンは何と寛大なるものでしょうか。それは、エリクサー⁶⁷の謎を易しい言葉を用いて明瞭に語り、錬成の技の秘密を達人ならではの語り方で説明する賢者です。ペンはあたかも、あなた様の土地にいた魔女たる女王⁶⁸に戦いが織りなされる前に仕えて気に入られ、古今のあらゆる魔術を与えられたかのようです。あるいは、ムアッラカ⁶⁹、あの見捨てられた古い建物において館の秘宝ないし壁の下の財宝を見つけたかのようです。さもなくば、アーチ橋⁷⁰の建設者から、死の運命がその者から望みを奪い去る前に、不思議さのわざを手に入れたかのようです。または、猛者達が戦闘を始める前に、ルームのグレゴリオス⁷¹の持ち物をペンが引き継いだかのようです。あるいは、イブン・アビー・サルフ⁷²がペンに//p.164//征服で奪い取った財産や家畜を引き渡したかのようです。さもなくば、ラウフ・イブン・ハーティム⁷³がペンのために達することを決意したかのようです。または、アグラブ家に仕えて富を手に入れたかのようです。あるいは、ズイヤーダトゥツラー⁷⁴がより多くのものを特にペンに与えたかのようです。さもなくば、ペンはアブー・ヤズィードの一件ではシリア派と協力したかのようです。または、サンハージャ族⁷⁵に助言を与えて正しい道を進み、彼らへの賞賛を永遠のものとするので、嘲笑う者すべてを辱めたかのようです。

ペンとは何と驚くべきものでしょうか⁷⁶。ペンから発した修辭術の第二弦は第三弦で強められた⁷⁷のです。それゆえに、ペンは独創的な第二弦と第三弦の間から、耳を魅惑し、心を虜にする調べを引き出しました。どうやったら、それを避けることができるでしょうか。//p.165//また第三弦を加えながら、唯一神信仰の旋法⁷⁸にどのようにして接することが出来たのでしょうか⁷⁹。我々は助け手たる神に沈黙と慎みの状態で赦しを乞い願います。さて、そのペンはといえば、天地創造の前から神の唯一性について語る者であります⁸⁰。細い体と淡い色という信仰の保持者たる貴人達の特徴を持つ者であります。のみならず、ペンは真偽を分かつ人に与えられた奇跡であり、サーリヤ⁸¹の逸話で伝えられている事であり、長い間ヴェールで顔を隠し時代が転変した後でも、その顔を顕にすることが出来るものです。また、ペンは高貴なるお方の代理を務める舌です。矢の一撃とは、矢そのものに帰されるものでなく、狙いをつけた射手にこそ帰されるものなのです。雲があれば、稲妻を否定することなかれ、神の唯一

性の立場に確信を持つ者達がいれば、常ならぬ奇跡を否定することなかれ。美德が望むものすなわち、敬虔さから生じる驚異や、感謝がそこで祈りを捧げる高貴な性格の礼拝所、それは修辭術の庭園です。その庭園は独創の風を巻き起こし、本性の雲を呼び寄せ、さらに、自らの主の許しを得て二度も果実を実らせました。いや、むしろ、「美德が望むのは」力強い騎馬軍団⁸²であります。その戦列はアリフの槍で突き、批判はそれを望まずその周りを飛び回ろうとしません。その戦列はヌーンの弓を引き絞りを射ました。またその軍団を守る、紙の白とインクの黒からなる斑の馬は隊伍を組みました。//p.166//

ハワルナク宮とサディール宮⁸³の間の水場においてめぐる杯は、知性があり理性のあるものと、泡のようにコマの並ぶ酒壺の双六で賭けをおこなうに古い葡萄酒ですが、活発な若さを贈ります。イブン・スライジュ⁸⁴が鞍を置いて手綱で制御し、とつとつとしか話せなかったガリド⁸⁵が、流暢にアラビア語を話し始めます。異国の葦笛はアラビア語を語ります。枝切れでマアバド⁸⁶はリズムを取ります。染められた手のひらは指を折り数え始めます。ウードの第二弦と第三弦上の指のごとくです。そして、サキールのリズムを第二サキール（重律）⁸⁷で盛り上げ、//p.167//歌声が響く住処にこだまが返るとき、ミルワド⁸⁸は色づけをはじめ、または蜘蛛は急ぎ足で進みます。

望むものを得ることについて、または離れていた恋人がやってくることに付いて伝えるものがなんだと言うのでしょうか。歓待すべき訪問者がやって来た喜びや、旅することが楽しい使者がやって来た喜びについて家族に袖をふって吉報を知らせることの方がすばらしいのです。

私たちはあなた様の書き付けのごとき騎馬軍団のような手紙を見たことがあります。それは予備の馬を従え端綱につなぐ陽気にはしゃいでいます。その馬の背の前半分は騎士たちの花嫁たちを乗せるべく心待ちにしています。美しい旋律の澄んだいななきをあげると喜びの馬衣を揺すり立ち並びます。もし、ザリーム⁸⁹がそれらの馬の姿に似ていると言うならば、それは公正さを欠いています。またはガゼルがそれらの馬と首や尻の美しさを競うならば、それはうわごとを言っているか、夢でも見ているのでしょうか。

もしアスマイー⁸¹が馬の額の白い星や点になにか問題があるのかと問われれば、その馬の美しい顔を示しながら次のように述べるでしょう。ニ
p.168//

「サーリムは目と鼻の間の皮（大切なもの）である」⁸²

足の肉付きの良い馬の足のおおのについては、流星のごとく駆け、首はすらりと高くあがり、鞍敷の下の胴幅は広く、しっとりしたそよ風の布で体を拭われます。

飲み仲間には布を通して注がれる新鮮な葡萄酒の色のごとき赤色の馬について。寒い時期にあつてもその色は薔薇色に染まり、その顔の水平線は幸運の星により生き生きとされます。叙述する者たちがその美点を数えて述べようとしても、数えきれぬものではありません。それは、潮の高さを競い合う海であり、激しく競い合つて吹き荒れる風です。その尻をみれば左右が均等に分かれたすばらしい馬です。力の限りに競争させれば、真つ先に勝利の華竿を取るすばらしき力を持った良馬です。//p.169//その額に白い星をそなえた赤馬は、星の白さとほほを一色に染める赤の完璧な美のかたちを示します。そして、ワジーフを祖とする高貴な性質をまるで伝承の様に受け継いでいます。伝承家であるイブン・ジャッド⁸³に由来する伝承は決して否定されません。

その性質と輝かしい顔が見くたされることを許さない金色の馬^{アッシュカ}について。それはあたかも黄金から造形され、真珠により輝き、橄欖石の蹄鉄をうたれ、ハディースにあるような吉兆と恩寵の印をつけられ、戦場で戦えば負けを知らず、それは次々と敵の頭を射抜いた矢の手柄をすべて手にします。それは、まるで遺産分割の取り分をそっくり手に入れたかのようです。その天球のごとき臀部の丸みは、強制運動と自然運動の二つの性質⁸⁴に従います。天に向け耳をたてている様は、天啓を受けようとしているかののごとくです。それは、ハムザを付けるか付けないか⁸⁵が曖昧なときには、いななきの言葉で不明瞭なことを明らかにしようとします。体の金色や星の銀色はディーナール金貨やディールハム銀貨の輝きを持って人々を魅了します。それは、突進すれば、石礫や大風の如くです。また、反転して立ち向かえば、額の星が昂り向かつて輝く黄昏の空の如くです。//p.170//

野生の野獣たちを枷にかけ、様々な美質を我がものとし、貴顕の人を解

放するところの黄色の馬^{アッシュカ}について。「騎馬軍団の隊長と言えは誰であるか、驚くべき逸話の主であるあなたは誰か」と問われれば、「それはムハッラブ・イブン・アビー・スフラ⁸⁶だ」と応えます。それはいろいろな出来事のあつた庭園のその色をした水仙です。それによって打ち続く戦いはほこりを浴びせられます。それは紅花で染められたような真つ赤な夕やみに圧倒的な勢いで向かつていきます。それを身にまとい、昨日の太陽の残光から光の糸を取り、その糸から自らの衣を織り上げ、か的美質がそれに対抗するために助けを求めてもそれは敵対心も持ちません。それは、日暮れであり、そのたてがみと尻尾で夜の帳の裾をしつかりと掴んでいます。またそれは、夜の闇の中から昇ってくる星であり、地平線のファルカド⁸⁷とカノープス⁸⁸はそれを妬みます。

その色によつて幅広の鎧や、ゆつたりとした鎖帷子をまとつたようなねずみ色の馬^{アッシュカ}について。その銀色の体に高貴な印がつけられれば、たくさんの飾りを付けています。それは本質が見くたされない白毛まじりの馬であり、武装をしても「⁸⁹」しくなくても速く走り、丘のごとく丈が高く、軍団に登録されている中でも抜群にすばらしいものです。それはなんとすばらしい馬か、よく鍛えられ長旅の行軍になれており、先人たちの極みにまで努力し力を振り絞り、マールイクから卓越した美質を持つカリフについて伝えているアッシュハブ⁹⁰でもあるものです。

競いあつて翔るときには、その野雁の翼を借りるがごとき野雁色の馬^{フバール}について。風雲急を告げるとき、名馬の祖と仰がれる高貴な血筋を奮い立たせれば、豹をも退け、命を奪い血にまみれた頭の皮を剥ぎ取ります。それは、まるで無数の薔薇の花びらが盆からその上にまき散らされるが如くです。または漆黒の闇が去るときに、朝焼けの赤さが払暁の白さを染め上げる天空の如くです。

その本質を誰もが知っている「そこへ目を向けるといつも目が引きつけられる」⁹¹紙色の馬^{キタース}について。馬衣を取り除くと輝く一つの星です。ものごとの手や、時の移ろいの筆が色を混ぜ合わせる前の全き純粋な白です。その騎馬軍団の先頭に立つのは純白の旗、戦場の白刃です。//p.172//その馬は若者の瑞々しさを持ちながら白髪のごとく威厳を纏っています。そして白き衣を纏ったときには、説教師の調べに合わせたその長々とした心地の良い嘶きに人々は耳を傾けます。その馬のことを最後に述べることを咎めるものがあるのなら、我々は次のように述べます。「ワーウの文字は男女の

間にも、そして紅花と真珠の間にも差をつけません。」「名馬に序列をつけるとは、馬の額の星のほほえみと、馬の前髪の幸運の印と、見る者にとっての喜びと慰めに對し、何とひどいことでしょうか。」

もし、人々が古のものを讃えることに身を焦がして新しいものには「卑しい」皮裂きの仕事を与え、身内鬣原をする者が分不相応な任官を迫り、召使いが主人の地位を望み、豊かな者が持たざる者のように扱われ、不景気な市場において穀物の量がごまかされ、夜の帳が降りて均衡の取れた天球に傾きが現れたならば、「そのような時に」名馬として思い出されるのは、次のような馬たちでしょう。ワジーフ、ハッタール、ザード、ニ p173/ズー・アルヒマル、ダーヒス、サクブ、アブジャル、ザード・アツラクブ、ジャムーフ、ヤフムーム、クマイト、マクトウム、アワジュ、フルワーン、ラーヒク、ガドバーン、アフザル、ザアファラーン、p174/ムハッバル、ラッアープ、アガッル、グラープ、シユウラ、ウカーブ、ファイヤード、ヤアブープ、ムズハブ、ヤアスーブ、サムート、クタイプ、ハイダブ、スパイブ、ウフループ、ハッダージュ、p175/ハルーン、ハラージュ、アルワー、ジャンーフ、アフワー、ミジャーフ、アサー、ナアーマ、バルカー、ハマーマ、サカーブ、ジャラーダ、ハウサー、アラード。

けれども、その場にいる者とその場にはいない者とは何と異なることでしょう。また、しなければいけないことと p176/したいことは何と異なることでしょう。過去の出来事と目の前の出来事との間は自ずと明らかです。疑いのないものと疑いのあるものは何と異なることでしょう。「そのことについて」次の詩人の言葉は言い得て妙です。

「見たものを取り、聞いたものを捨てよ」

新たな文言^{ナニスィフ}によって法規定は異なります。良馬を選ぶときに最もよくないものは耳が聞こえない口がきけないものです。ただし、預言者が乗ったもの、または戦場で自軍を讃えるときに神徴があった馬は別です。見たことよりも聞いたことを優先する者は愚かです。描写がなされたこれらの美点の数々が、もし公正に取り扱えるのであれば、心の穀粒を稜として与え、若さの泉へと連れて行き、美少年のまだ柔らかない頬の髭で造った面繋^{おもが}で飾り、夜毎に歌姫の美声に酔わせ、p177/新月の蹄鉄を打ち、

馬衣の代わりにすばらしき牧草地を掛けてやるものなのですが。

最後にはほっそりとした見目麗しき馬^{ウマ}についてお話ししましょう。その牧者である美麗な若者たちが安住の牧地へと導き、紅玉髓のごとき若者が黒い玉石のごとき馬を連れてくる姿は、讃えるべき造物主があらゆる被造物を見事に造り上げた証です。それに見とれる人の目を釘付けにします。「黒き」ダチヨウの姿もかすみ、「白き」ガゼルも身を隠し、博識で雄弁な口のおまいものも黙り込んでしまいます。

言葉が詰まったときには、状況そのものが代わりにあなた様に語ります。あなた様の寛大さは「慈雨をもたらす」雲のごとく馬の美しさを花開かせました。あなた様という恩寵があるので、このような美しさを花開かせたのです。おお、そのすべてを見ても、また一部を見ても寛大な御方、高貴な出自の王よ。もしその馬と釣り合う賞賛の言葉があるならば、あなた様を量りきる秤もあつたでしょう。その馬の美しさに相応しい賛辞があるならば、我々はわずかな水を手にしてあなた様の恩恵のナイル川に臨むこともできたでしょう。または、私たちは次のように言えば良いでしょう。その馬こそ、あなた様の先祖であるムスタンスイルに援助を求めた者が「あなたの馬でもって至れ」という詩句で言ったところの馬だと。ニ p178/その詩句がよまれたのは、アンダルス^{Andalus}の東の地がその詩人の涙で喉を詰まらせ、団結がくずれて分裂が支配的となり、そこでは裂け目が広がった——裁定は神にあり——時のことでした。そして、唯一神信仰の立場が三位一体論や忌まわしいその一党に對抗するための支援に最も相応しいと考えた時のことでした。

今や神こそが、かの「信者の」意図^{ニヤ}さえあればルダイナの長槍^{ウラ}を不要のものとなし、かの信仰の場所（カーバ神殿）から御建物の主（神）への祈願をすれば槍の助けや水の海から運命の海へと飛び込む馬を不要なものとなし、威風あたりを払う獅子のごとき戦士に引かれたアラブの騎馬軍団をも不要なものとなします。神はその贈り物（援助）によって愛のこともった約束と唯一神信徒の保護を改めて定めました。それは、その定められたことが根源を示す徴となり、停止と分離の呼びかけをきっぱりと否定し、そしてアリの文字が接合のアリフ^{アルフ}であり続け（途切れることなく続き）、ラームの文字が槍から守ってくれる鎧^{カラ}である（壊れることなく強固な）ような友情^{ウラフ}について知らせるためでした。

あなた様の使者が我らの前にやってきて、あなた様の美德については

きりと述べました。その美徳は、あなた様の素晴らしさや、家柄の由緒正しさを、あなた様という満月が巡る軌道の極を知っている者は誰しも認めるところのものです。私たちは心を砕いて使者に美徳について応えました。もしうまく言葉が出さずれば、未熟な果実のように手短かな言葉では満足しませんし、その寛大さの長さを短いもので計ったりはしなかつたでしょう。

【註】

(1) *Saq hurr*. 雌は *qunūr*. Lane は *turtle-dove* (トキジバト) との訳語を与えている (E.W. Lane, *Arabic-English Lexicon*, London, 1877, pp. 2562-2563)。雌雄互いにむつまじいこと知られており、雌はつがいの雄が死ぬと別の雄に近づかなくなると言われ⁹。Ibn Fadl Allāh al-'Umari, *Masālik al-absār fi mumāṭik al-ansār: fi al-hayawān wa al-nabāt wa al-ma'ādīn*, Cairo: Maktabat al-Madburī, 1996, p. 116.

(2) 当時トレムセンに滞在していた医師で、イブン・ハルドゥーンとイブン・ハティープ共通の友人。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、八九頁参照。

(3) マリーン朝のトレムセン攻略に際して、イブン・ハルドゥーンが港町フナインからアンダルスに逃れようとしてマリーン朝軍に捕らえられたこと、その後、彼が君主アブー・ファリス・アブドゥルアズィズに協力することになったことを指している。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九二頁参照。

(4) マリーン朝もナスル朝も、互いに相手の亡命王族を保護し、時にはそれを支援して相手国の政変を促すといったことを繰り返してきた。そうした両王朝の微妙な関係を婉曲に示す表現であろう。

(5) *Jūdī*. ノアの方舟が洪水の後に乗り上げた場所。「クルアーン」第一章第四四節。

(6) 『クルアーン』第十七章第九節。

(7) *Juhaynat Kabāri-hi*. ジュハイナ族はクダア族の一派(高野太輔『アラブ系譜体系の誕生と発展』山川出版社、二〇〇八年、六六―六七頁)。ことわざは、「ジュハイナ族が真相を知る」(*inda Juhayna al-khabar al-yaqīn*) とある。al-Maydānī, *Mu'jam al-amḥāl*, 1/304; *Lisān al-'Arab*, "JH".

(8) *Abū Yahyā Ibn Abī Madyan*. マリーン朝君主アブドゥルアズィズの書記。グラナダに残されたイブン・ハティープの家族を呼び寄せるための外交使節として、グラナダに派遣された (*al-'Ibār*, vol. 7, p. 335)。

(9) *Abū al-Ḥasan*. *Abū* イブン・ハティープの息子で詩人。父の著作『グラナダ史』をカイロに届けたのは彼である。晩年はフェズでマリーン朝君主アブー・アッバー

スに詩人として仕えた (al-Maqqarī, *Najf al-rib min ghṣn al-andalus al-rāqib*, ed. Ihsān 'Abbās, Beirut, vol. 7, pp. 301-302; *Livroa Delgado* ed., *Biblioteca de al-Andalus, Almeria: Fundación Ibn Tufayl*, 2004-12, tomo 3, pp. 642-643; イブン・ハルドゥーン自伝5)、八五頁参照)。なお、イブン・ハティープの息子としては、アブー・ハサン・アリーを含め、アブドゥッラー、ムハンマドの三人の名が知られている (al-Maqqarī, *Najf al-rib*, vol. 7, p. 289)。

(10) *yawm al-ḥir*. ラマダーン月の断食が明けた第一〇月の初日のこと。

(11) *ḥir* は、トレムセンに在るイブン・ハティープ宛の書簡は七七二―二二七一年付けとなっている。しかし、イブン・ハティープ自身の記述および『省察すべき実例の書』によれば、イブン・ハティープのトレムセン到着は翌七七三年であり、食い違いが生じている (Ibn al-Khaṭīb, *A'māl al-q'ān fi man b'ay' a qabla al-ihlām min mulūk al-Islām*, ed. E. Lévi-Provençal, Beirut, 1956, p. 318; *al-'Ibār*, vol. 7, 335)。

(12) マグリブに亡命したイブン・ハティープからイブン・ハルドゥーンに宛てて送った書簡。上で引用されているイブン・ハルドゥーンの書簡は、それに対する返信である。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九四頁参照。

(13) *ḥudna*. ナスル朝君主ムハンマド五世が一二七〇年五月三二日にカステイリヤ王エンリケ二世(在位一二六九―七九年)と結んだ八年間の休戦協定のことを指すと思われる。ナスル朝は、カステイリヤ王国でペドロ一世とその庶兄エンリケとの間に勃発したトラスタマラ内戦(一二六六―六九年)にペドロ側に立って介入し、エンリケ側の城塞や都市を攻撃していた。ペドロ敗死後もしばらくはエンリケとの戦いが続いたが、一二七〇年の休戦協定によって戦争は終結した。この休戦協定はムハンマド五世の治世を通じて更新され続け、一五世紀初頭までの長い平和の時代をナスル朝にもたらした (Ahmad Muḥār al-'Abbādī, *El Reino de Granada en la época de Muḥammad V*, Madrid: Instituto de Estudios Islámicos, 1973, p. 88)。

(14) *qarāba*. ムハンマド五世にマグリブ亡命を強いることになったイスマーイール二世(在位一二三九―六〇年)およびムハンマド六世(在位一二六〇―六二年)らナスル朝の王族のことを指しているであろう。「イブン・ハルドゥーン自伝4」、九五頁、註一一六参照。

(15) *ḥāl*. 心的状態。タサウウフの用語で、修行者の心に生起する状態・気分・感情を指す。古典理論においては、修行者の心に一時的に生起する状態を意味し、修行者の意志に関係なく生起し消え去るもので、修行者はその生起に逆らうことも消失を留めようとすることもできない、とされる。この場合、イブン・ハティープは自分の意志ではないことを主張しようとして、この言葉を用いていると思われる(「ハール」『岩波イスラーム辞典』)。

- (16) *mūta qabala an tamūt*. タサウウフの文脈では、肉体の死の前に自我の死、すなわち自我の捨象を経験せよ、という意味で解釈されている。従って、イブン・ハティープはこの発言によって、隠遁生活に入ることを表明しているのである。なおこのムハンマドの言葉は、イブン・マージヤの『スナン』に対する註釈書にのみ収録されているようである。cf. *Sunan Ibn Māja bi-sharh al-Sindī, kitāb al-muqaddima, abwab fadā'il aṣṣāb Rasūl Allāh*. またティエリー・ザルコンス著『タサウウフ』東長靖監修、遠藤ゆかり訳、創元社、二〇一一年、〇二四―〇二六頁も参照のこと。
- (17) 『クルアーン』第四章第一〇〇節(日本語訳は井筒訳『コーラン』上巻一二八頁を参考にした)。「誰であれアッラーの御為に家郷を棄てる人は、この地上にいくらでも身を寄せる場所と余裕とを見出すであろう。また誰でも己が家を後にしてアッラーとその使徒(マホメット)のもとに居を移し、その後で死に追いつかれた場合、その人の報酬はかしこくもアッラーが引き受け給う。アッラーは慈悲深くおわす故に」という節の一部を引用することで、イブン・ハティープは自分が故郷アンダルスを離れ、帰参叶わず異郷の地で果てることになっても、神の救いがあるだろうことをほめかしている。
- (18) 七六九年/一三六七年付けのイブン・ハティープからイブン・ハルドゥーンへの書簡によれば、ムハンマド五世は、カステイリヤ王国の内戦に介入することでキリスト教徒に対しておさめた勝利の結果、「神により満ち足りた者(al-Chaḥī bi-Allāh)」というラカブを名乗った(イブン・ハルドゥーン自伝5)、八五頁; al-'Abbādī, *El Reino de Granada en la época de Muhammad V*, pp. 2, 77)。
- (19) 『クルアーン』第七章第二二九節(日本語訳は井筒訳『コーラン』上巻二二二頁を参照)。クルアーンの原文では *fa-yanzura kayfa ta'malna* とあるが、ここでは *yanzura kayfa ta'malna* となっている。
- (20) ムハンマド五世に仕える身であったイブン・ハティープ自身のことを指すと思われる。
- (21) al-'aladī. 前述のアブー・ハサンのことであろうか。本訳稿三三頁及び四三頁、註九参照。
- (22) 以下で説明されるハムザおよびアブー・ザイヤーンによる中央マグリブの争乱については、「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九三頁参照。
- (23) Ḥiṣn Tājūmūnit. 不詳。
- (24) Abu Bakr ibn Ghazi. マリーン朝君主アブドゥルアズィーズの中央マグリブ遠征に同行したワズィールの一人。「イブン・ハルドゥーン自伝3」、六五頁、註八六参照。
- (25) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、五四頁、註一五三参照。
- (26) Zughba. 中央マグリブで活動するアラブ遊牧民の一派。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九四頁、註五参照。
- (27) Jabal Tāfir. 中央マグリブの山地。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、一〇〇頁、註九九参照。
- (28) Dawawida min al-Riyāh. ビスクラ周辺を活動地域とするイブン・ハルドゥーンと親しいアラブ遊牧民。「イブン・ハルドゥーン自伝4」、九八頁、註一七三参照。
- (29) Ahmad ibn Muzni. イブン・ハルドゥーンを保護するビスクラの支配者。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九五頁、註一三三参照。
- (30) al-Qaṭīa. ティーターリ山近くの地名。カトファーQaṭīaとも表記する。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、一〇〇頁、註一〇一参照。
- (31) Ghannara. ザナータ系ベルベルの部族(al-'Iḥar, vol. 7, p. 11)。
- (32) Aḥlād Yahyā ibn 'Alī ibn Sibā. 「イブン・ハルドゥーン自伝5」、一〇二頁、註一一九参照。
- (33) Warkala. ビスクラの南方約三五〇キロメートルに位置するサハラ砂漠のオアシス都市。西方のムサーブ地方と同様、サハラ交易で栄えるとともに、僻遠に位置することから、古来、ハワリーリジュ派のような分派や多くの亡命者を受け入れてきた。『歴史序説』では、ワルガラWargalanとも表記されている(『歴史序説』第一巻、一一七頁)。
- (34) *fasī*. ここから、校訂版二二四頁までの約六〇頁にわたってイブン・ハティープの書簡文二通が引用されている。そのうち、二〇九頁まではナスル朝君主ムハンマド五世の名でハフス朝君主アブー・イスハークに宛てて書いた書簡、残りはイブン・ハルドゥーンに宛てた彼の子息誕生を祝う書簡である。ただし、『省察すべき実例の書』の初期のバージョンを反映していると考えられるブラーク本においては、この二点の書簡は欠落している。したがって、この余録は後になってからイブン・ハルドゥーンが付け加えたのであろう。なお、ブラーク本とは別系統の写本を参照した『省察すべき実例の書』の刊本には、この部分が収録されているものもあるが、そこでは本訳稿で「余録」と訳した *fasī* が、「ワズィール・イブン・ハティープの卓越性 *fadī al-wazīr Ibn al-Khaṭīb*」となっている。cf. Ibn Khaldūn, *Tarīkh Ibn Khaldūn*, Beirut: Dar al-Kutub al-'Ilmiyya, 2003, vol. 7, p. 527.
- (35) この書簡は押韻散文(サジュウ)による書簡文学の傑作としてよく知られており、イブン・ハティープ自身の著作ははじめ多くの著作に引用されている。イブン・ハティープが自らの書簡集 *Rayḥana al-karīb* で記しているところによれば、七七〇年ラビーウ・サーニイ月三日/一三六八年十一月一日付けで書かれたものであろう。Ibn al-Khaṭīb, *al-Jāḥiz fī akhbār Ḥanāzīya*, ed. Muhammad 'Abd Allāh 'Inān, 4 vols., Cairo: Maktabat al-Khānī, 1973-78, vol. 4, pp. 561-588; Ibn al-Khaṭīb, *Rayḥana al-karīb wa-nuṣṣat al-amnātib*, ed. Muḥammad 'Abd Allāh 'Inān, 2 vols., Cairo: Maktabat

al-Khanīfī, 1980-81, vol. 1, pp. 179-202; Ibn al-Aḥmar, *Nahṭ farā'id al-jumān fī nazm fuḥūl al-zamān*, ed. Muḥammad Rīdwan al-Dāya, Beirut: Dar al-Thaqāfī, 1967, pp. 256-288; al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-a-shā*, 14 vols., Cairo: al-Maṭba'a al-Amīriyya, 1915-18, vol. 6, pp. 536-558.

(36) 中東・地中海世界では、葡萄酒を水で割って飲む習慣がある。

(37) カルカシャンデーの引用では、「しかじかの (al-kaḥḥa)」の代わりに系譜上の各人物に対して非常に長い賞賛句を記している。例えば、「宛名人本人のアブ・イスハークについては『al-jalīl al-kaḥr al-shahr al-imām al-himām al-aḥlā al-awḥad al-as'ad al-as'ad al-asnā al-a'dal al-afḥal al-asnā al-aḥar al-aqḥar al-ardā al-aḥlā al-ak-mal』といった具合である。書簡原文には含まれていたはずのこれら冗長な賞賛句を省略する代わりに用いられたのが「しかじかの」という表現だと思われる。

(38) 校訂本では「イブン・アビー・イスハーク」「アビー・ヤフヤー・イブン・アビー・バクル」「アビー・ムハンマド・イブン・アブドゥルワーヒド」と、実際のハフス朝の系図に合致しない「イブン」が三箇所に認められる。しかし、アヤソフイヤ写本にはこのいずれにも「イブン」の語は見られないので校訂者の誤りであろう。この書簡を引用する他の著作でも、ほぼ「イブン」は見られない。cf. Ibn al-Khaṭīb, *al-Jihāḍ*, vol. 4, p. 561; Ibn al-Khaṭīb, *Rayḥānāt al-kutāb*, vol. 1, p. 179; Ibn al-Aḥmar, *Nahṭ farā'id al-jumān*, p. 257; al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-a-shā*, vol. 6, p. 536.

(39) この書簡の宛先であるハフス朝君主アブ・イスハーク・イブラーヒームを同名の預言者イブラーヒーム(アブラハム)になぞらえた表現。クルアーン第二章第一二六節にイブラーヒームの言葉として伝えられている「主よ、なにとぞ(ここを)安居の場所となし給え。その住民には果実を日々の糧として与え給え」を前提とする表現か。類似の内容はクルアーン第一章第三五節〜第三七節にも見られる。

(40) 'uqba al-dār. クルアーン第三章第二節および第二四節中に登場し、最後の審判の後に神が報償として与えるとされる「終の住処」(日本語訳は井筒訳『コーラン』による)。天国を指していると考えられる。

(41) この書簡の差出人ムハンマド五世の名はアヤソフイヤ写本には記されていないが、校訂者イブン・ターウイートは *Nahṭ farā'id al-jumān* に拠ってこれを補っている。しかし、彼の補正には「我らが主人にしてムスリム達の長アブ・ハッジャージュ・ユースフ」という部分が欠落しているため、本訳稿ではさらにこれを補った (cf. Ibn al-Aḥmar, *Nahṭ farā'id al-jumān*, p. 258)。なお、この書簡を引用する著作のうち、差出人の名を記すのは *Nahṭ farā'id al-jumān* のみであり、他の著作はアヤソフイヤ写本と同様に差出人の名を記していない。cf. Ibn al-Khaṭīb, *al-Jihāḍ*, vol. 4, p. 562; Ibn al-Khaṭīb, *Rayḥānāt al-kutāb*, vol. 1, p. 180; al-Qalqashandī,

Ṣubḥ al-a-shā, vol. 6, p. 536. なお、(37)で登場する「神により満ち足りた者 (al-Chant bi-Allah)」は、前述のようにナスル朝君主ムハンマド五世のラカブにあたる (本訳稿註一八参照)。

(42) *qind nujannada*. 校訂者が指摘するように、「魂は集められた軍隊のようなもので、互いに知り合っている者同士は仲良くするが、知らない者同士は仲が悪い」というハディースを引用した表現と考えられる(ただし元のハディースでは「軍隊」は *jund* の語が用いられ、若干異なっている)。このハディースは、プハリーの「真正集」(「売買の書」の「預言者達」節、上記の日本語訳は、牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成』、中央公論新社、第三巻、二八九頁による)とムスリム・イブン・ハッジャージュの『真正集』(「善行と親戚縁者関係と行儀の書」の「魂は徴兵された軍隊である」節)に収められている。

(43) 旧約聖書創世記に登場する、カイン、アベルに続くアダムの第三子。聖書的世界観によれば、現行人類は全て彼の子孫とされる。クルアーンに直接の言及は無いが、イスラームにおいても最初の預言者の一人に数えられている (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Shīth")。

(44) クルアーンにもその名が登場し(第六章第八五節、第三七章第一二三節、第一三〇節)、民間伝承に登場するビドル(緑の男)のモチーフの一人に挙げられるユダヤの預言者の一人。旧約聖書列王記に登場し、新約聖書でも重視されていた (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Ilyās"; 「イルヤース」「ビドル」『岩波イスラーム辞典』)。

(45) 本訳稿註三六参照。

(46) *al-ṭā*. とくに大天使ガブリエルを指して用いられることもある。この箇所と同様に天使 (*al-malā'ik*) と対になった表現はクルアーン第七〇章第四節および第九七章第四節に登場するが、いずれも聖霊とはガブリエルを指すと解釈されることが多い。

(47) リヤーフ族は当時、イフリーキヤから中央マグリブにかけて大きな勢力を誇っていたアラブ遊牧民ヒラール族の一派。「イブン・ハルドゥーン自伝4」、九八頁、註一七三参照。ミルダース族もアラブ遊牧民の一派だが、イフリーキヤでは、リヤーフ族の一支族およびスライム族の一支族の二つが見られる (*al-Jabar*, vol. 6, pp. 32, 73)。

(48) 校訂者イブン・ターウイートは「王 *malik*」と読むが、意味や他の著作の校訂者の読みを参考に「王権 *mulk*」と読んだ。Ibn al-Khaṭīb, *al-Jihāḍ*, vol. 4, p. 564.

(49) (37)で「杖で岩を叩いた人」とは預言者モーセのことを指し、神の命に従って彼が杖で岩を叩き、イスラエル一二氏族のために泉を湧き出させた事績を踏まえた表現である。この逸話は旧約聖書出エジプト記(第十七章)や民数記(第二〇章)

- に記され、クルアーン(第七章第一六〇節)も伝えている。
- (50) *Amwās*. エルサレムの近郊に位置する大きな村。一般にはエマオに比定されている。エマオは紀元前から存在し、ローマ・ビザンツ時代を通じて栄えた。七世紀前半のアラブ軍による征服の後に伝染病が流行し、二万五千人が死亡したとされる(*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Amwās?”)。
- (51) *As-Nil* (銀梅花)を指す。芳香を持つ常緑樹で、樹高は人の背丈ほどになる。その葉や花、実は主に薬として用いられた(*Lane, Arabic-English Lexicon*, p. 125; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “As?”)。
- (52) *Dahhāk-hā wa ‘Abhās-hā*. 初期の由緒正しい伝承者のたとえ。ダッハーク、アッバースともに該当するハディース伝承者は複数いるため、書簡の作者イブン・ハティーンは特定の人物を想定していないと校訂者は推測している。なお後者の「アッバース」をその名に持つ伝承者としては、アッバース朝初代カリフ・サッファーフの曾祖父でもあり、アリーのもとでバスラ総督をつとめたアブドゥッラー・イブン・アッバースがとくに有名である。代表的な教友の一人で、数多くのハディースを伝える他、クルアーン解釈学の権威として知られる(「イブン・アッバース」『岩波イスラーム辞典』)。一方「ダッハーク」については、ダッハーク・イブン・カイスやサービト・イブン・ダッハーク、ダッハーク・イブン・ハリーフといった教友世代の人物が挙げられるが、「アッバース」と比べ決め手に欠く。
- (53) クルアーン第五十六章第三五節(日本語訳は井筒訳『コーラン』下巻一六九頁を参照)。
- (54) *al-sanih*, *al-bana*. 吉兆の鳥とは、右に向かって飛んでいく鳥のこと。バインの樹については、「イブン・ハルドゥーン自伝」³一六七頁、註一一五参照。いずれもアラブの古典詩に類出する題材であり、アラブの出自を持つ書簡という次の表現はこれをふまえたものである。
- (55) *Kināna*. 北アラブ(アドナーン族)のムドリカ族の系統に属し、預言者ムハンマドの十三代前の祖先にあたることとされる人物。彼を名祖とする系譜集団はキナーナ族と呼ばれ、アラブの系譜学上、クライシユ族の母集団に位置づけられている。ここでとくに選ばれたのは、「矢筒」と押韻散文の韻を整える為であると考えられる(高野太輔『アラブ系譜体系の誕生と発展』三三二―三三三頁; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Kināna?”)。
- (56) 原文にある動詞 *takharāqa* の意味は不明だが、文脈と語根のニュアンスを踏まえ、て訳出した。
- (57) *al-ikstr*. キリシア語の *σπινος*、シリア語の *ksryn* に由来し、元来は目や外傷の治療に用いられる粉末薬を指していたが、イスラーム錬金術において、卑金属を貴金属に錬成するための触媒の意味で用いられるようになった。「賢者の石 *al-hajar al-mukarram*, *hajar al-fukkanā*」ともしばしば同一視され、その生成は錬金術における最大の目標とされた。なお、錬金術の知識とともに西欧世界に伝わり、*elixir* の語源ともなった(*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “al-ikstr?”)。
- (58) *al-nalika al-sāhira*. 七世紀後半のアラブによるマグリブ征服に頑強に抵抗した伝説的なベルベル系女性指導者にカーヒナ *al-Kāhina*、すなわち「女子言者」とあだ名される人物がいる。彼女のことを示唆した表現であろう。cf. Ibn ‘Abd al-Hakam, *Futūh Misr wa akhbār-hā*, ed. Charles C. Torrey, New Haven, 1922, pp. 200-201; *al-Raqāq, Tarīkh l-yūqūya wa al-Maghrib*, ed. A. al-Zaydān, Beirut, 1990, pp. 28-31; *al-‘Ibar*, vol. 7, p. 10.)の箇所からイフリーキヤの歴史を引き合いに出した表現が続くが、ベンが古くから常にこの地の支配者に仕え続けてきた様子を示そうとしたものであろう。
- (59) *al-Mu‘allaqa*. カルタゴの北西の丘に建造されたローマ期の貯水池跡。無数のアーチ型の屋根を有する巨大な建造物で、南の山岳地帯から水道橋で水を運んでいた。都市カルタゴがアラブ・イスラームの征服によって廃墟となった後も、城塞として利用された(*al-Bakrī, Kitāb al-masālik wa al-mamālik*, ed. A.P. Van Leeuwen & A. Ferre, Tunis: Dar al-Gharb al-Islāmī, 1992, p. 702; *al-Idrīsī, Nuḥḥat al-mushāḥaḥ fi ikhtirāq al-‘āḡāq*, 2 vols., Cairo: Maktabat al-Thaqāfa al-Dīniyya, 1994, p. 286; *al-Himyārī, al-Rawḍ al-mi‘ār fi khbar al-aḡār*, ed. Ihsān ‘Abbas, Beirut: Librairie du Liban, 1975, p. 463; M. de Slane tr., *Les Prolegomenes d’Ibn Khaldoun*, 3 vols., Paris, 1863-68, vol. 2, p. 242, n. 4; 『歴史序説』、第二卷、四一九(四二四頁)。
- (60) *al-ḥanāya*. ローマ期にはカイラワーン近くの水源からカルタゴの貯水池まで長大な水道橋が建造され、前近代のムスリムにとっても驚異的な建造物として知られていた(*al-Bakrī, Kitāb al-masālik wa al-mamālik*, pp. 702-703; *al-Idrīsī, Nuḥḥat al-mushāḥaḥ*, pp. 287-288; *al-Himyārī, al-Rawḍ al-mi‘ār*, pp. 463-464; 『歴史序説』、第二卷、四一九(四二四頁)。
- (61) *Juḥf al-Rūm*. アラブ軍によるマグリブ征服の際にビザンツ帝国のカルタゴ総督の地位にあったグレゴリオスのこと。コンスタンティノーブルの皇帝に反旗を翻し、事実上自立していた。六四七年、スベイトラの戦いでアラブ軍に敗北し、戦死した。cf. Ibn ‘Abd al-Hakam, *Futūh Misr wa akhbār-hā*, p. 183.
- (62) *‘Abd Allāh ibn Abī Saḥb*. 第三代正統カリフ・ウスマーンの乳兄弟で、エジプト総督に任じられた。六四七年、エジプトからマグリブ方面に侵入し、スベイトラの戦いでビザンツのカルタゴ総督グレゴリオスを打ち破った。これがアラブ・ムスリムによる最初のマグリブ侵入となったが永続的な占領には至らず、アラブ軍はイフリーキヤのビザンツ系住民と和約を結び膨大な貢納金と戦利品を得てエジブ

トに帰還した。本文中で言及されている征服で奪い取った財産もこのことを示唆しているであろう。cf. Ibn 'Abd al-Hakam, *Fuṭūḥ Miṣr wa-ahḥabā-hā*, pp. 183-184.

- (63) Rawḥ ibn Ḥatīm (七九一年没)。ホラーサーン軍出身のムハッラブ家の一員で、アッバース朝カリフ・マンスールのハージブを務めた他、各地の総督を歴任した後、カリフ・ラシードによってイフリーキヤ総督に任じられた(在任七八八〜七九一年)。ムハッラブ家はラウフの兄弟ヤズィードが着任した七七二年以降、アグラブ朝が成立するまでの四半世紀の間、イフリーキヤ総督の地位をほぼ独占していた。

- (64) アグラブ家 (Al al-Aghlab) は、アッバース朝の宗主権下でイフリーキヤの総督職を世襲した(八〇〇〜九〇九年)。この王朝のもとではズィヤードトゥッラー (Ziyād al-Aḥab) という名の君主が、一世(在位八一七〜八三八年)、二世(在位八六三年)、三世(在位九〇三〜九〇九年)の三名いる。中でも一世はシチリア征服に着手した君主としてよく知られている。しかし、ここではアグラブ朝の代表的な君主名であると同時に、「より多くのもの (mazd)」という語と同語根であるために選択された表現であり、特に誰か一人を指しているわけではないと理解すべきであろう。

- (65) (نار)でのシリア派 (al-Shirā) とは、一〇世紀のイフリーキヤを支配したファアティマ朝のことを指している。一方、アブー・ヤズィード (Abū Yazīd) とはファアティマ朝に対して反乱を起こし(九四四〜九四七年)、一時はファアティマ朝を滅亡寸前まで追い込んだベルベル系のハワリリジュ派指導者。

- (66) Banū Saḥāba, サンハージャは、ザナータ、マスムータと並ぶベルベルの主要な系譜集団。ここでは、エジプト遷都後のファアティマ朝によってイフリーキヤ統治を委任されたズィリーリー朝(九七二〜一一四八年)のことを指していると考えられる。

- (67) この後の二・三行は極めて難解である。

- (68) ウードの第二弦、第三弦。

- (69) al-tahīḥ, maqām al-tawhīd. 前者は神学などの宗教的文脈では「三位一体(論)」を意味し、神の唯一性(タウヒード)を強調するイスラーム側から、唯一神に父と子と聖霊という三つの位格を認めるキリスト教を多神教的であると批判するなどにしばしば用いられる。他方、「立場・地位」を原義とする maqām は、音楽理論において「旋法」を示す。この一文は、音楽(ウード)と宗教の二つの意味を掛けている。

- (70) 神が最初に創ったのはペンとされることにちなむ。神の最初の被造物については諸説(天、玉座、光と影など)があるが、ペン説を探る立場は、スンナ派六書であるティルミズィーやアブー・ダーウードの『スナン』に採録される「神が最初に

創造したのはペンである(以下略)」とのハディースを典拠とし、各種のクルアーン解釈書でも取り上げられている。

- (71) Sa'īya ibn Zanīn ibn 'Umar ibn 'Abd Allāh ibn Jabir al-Kinānī (六五〇年頃没)。第二代正統カリフ・ウマル(別名「真偽を分かつ人」)の治世に軍隊の指揮官をつとめた人物。イラン方面に進攻し、イスファハーンを征服した。ここで「サーリヤの逸話」とは、直前に登場するウマルの奇跡の一つとして有名な次の故事にちなんでいる。すなわち、六四二年頃にムスリム軍とサーサーン朝軍が雌雄を決したニハーワンドの戦いにおいて、ムスリム側が山の上に隠れる敵軍に気付かなかったさい、ウマルはマディーナのミンバル(説教壇)にいながらにして、「サーリヤよ。山だ。山だ」と叫んで警告を発し、その声がニハーワンドにいたサーリヤの耳に届いたとされる。

- (72) 「騎馬軍団 kaṭība」は「書き付け」と、「戦列 saṭū」は「行」と、「隊列 kharīṭ」は「線」と解釈することもでき、軍隊と文章の二つの意味を持つ掛詞になっている。「アリフの槍」や「ヌーンの弓」、「紙の白とインクの黒からなる斑の馬」と併せて、この部分は文章(書簡)を書くことと軍隊の二つの意味が掛かっている。同様の表現は「イブン・ハルドゥーン自伝5」、八一頁にも見られる。

- (73) al-Khawarnaq, Saḍr. ハワルナク宮は、イラクのナジフ近郊に位置し、サーサーン朝時代にラム朝が建設した宮殿。イスラーム以前のアラブの詩人たちは、隣接するサディール宮と併せてしばしば詩の中で取り上げた (Yaḡūṭ, *Muḥam al-buldān*, Beirut, 1957, vol. 3, pp. 201-202; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., "al-Khawarnaq")。

- (74) Kisra. ベルシア語の人名 Khusrw のアラビア語表記。シリア語の Kusrō または Kusrō から派生したとされる。広義にはサーサーン朝君主の名や王の称号を意味するが、ここでは具体的にホスロー二世 Kisra Aparwiz (在位五九一〜六二八年)を指している。ティグリス川の上に架かる建物を建て、そこで宴席を開いたが、建物が流され、ホスロー二世自身も溺れ助けられたことがあるという故事にちなむ。

- (75) asraja Ibn Surayj. 「鞍を置く asraja」と人名の Ibn Surayj を掛詞にした言葉遊び。イブン・スライジュ Abū Yahyā 'Ubayd Allāh ibn Surayj (六六〇〜七一一四または七四四年)は、マッカで活躍したアラブ音楽のヒジャージー派の初期の有名な歌手。マッカの有力層に支持され、ウマイヤ朝カリフ、ワリド・イブン・アブドゥルマリクによりダマスカスにも招聘された。彼は ramal や hazaj などの軽いリズムを好んだが、重い(サキール)リズムについても修得していたとされる (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., "Ibn Surayj")。

- (76) al-Charāḍ, Abū Zayd (Yazīd?) (または Abū Marwān) 'Abd al-Malik (七一四年頃没)

に与えられた「瑞々しい」という意味の渾名。マッカでベルベル人の両親から生まれ、イブン・スライジュのもとで歌を学んだ。(Encyclopaedia of Islam, 2nd ed., "al-Charf")。

- (77) Abu 'Abbad Ma'bad ibn Wahb (七四三または七四四年没)。初期イスラーム時代の四大歌手の一人に数えられるマディーナ出身の有名な歌い手。旋律線が裝飾に富んだ重い(サキール)リズムを好み、彼の歌は al-mudun または al-jushn として知られた。彼は鞍にまたがり枝切れ (qadh) で鞍を叩いてリズムを取り、旋律を整えて歌ったとされる (Encyclopaedia of Islam, 2nd ed., "Ma'bad b. Wahb, Abū 'Abbad")。
- (78) 校訂者の註によれば、第一のサキール(重律)は、二つの重いリズム *iqā'* をつけて奏する。第二のサキールは二つの重いリズムをつなげその後軽いリズムに転じて奏する。

- (79) marāwid (単数形 mirwad)。アイラインに使われるコホルを塗布するための小さな棒状の道具 (Encyclopaedia of Islam, 2nd ed., "al-Kuh")。

- (80) Zalm. アサド族の Fadala ibn Hind ibn Shurayk が所有した馬として知られる名馬。「公正さを欠く zalm」の掛詞になっている。

- (81) 'Abd al-Malik ibn Qurayb ibn 'Alī ibn Asma' al-Bahī. Abū Sa'īd al-Asma'ī (七四〇〜八二八年)。バスラの著名なアラビア語学者にして詩人。クルアーン、ハディースをはじめ砂漠に住まうアラブ遊牧民が記憶する古い詩や物語を蒐集し記録し、非アラブの豪華なペルシア文化に対して素朴なアラブの生活や文化の優位性を主張した。また彼は自然科学、動物学に関する『馬の書 *Kitāb al-ḥayā'*』、『ラクダの書 *Kitāb al-bī'ī'*』、『人間の書 *Kitāb al-insān*』などの著作でも知られる (Encyclopaedia of Islam, 2nd ed., "al-Asma'ī")。

- (82) 校訂者の註によれば、アブドゥッラー・イブン・ウマルが息子のサーリムへの愛情を人々に批難されたときに詠んだ反駁の詩にちなむ表現。

- (83) al-ḥafz Ibn al-Jadd. 「ワジーフを祖とする 'an-jaddi-hi al-Wajih」の jadd に対する掛詞としてイブン・ジャッド Ibn al-Jadd を引用した表現。ジャッド家はセビーリヤの知識人名家。とりわけアブー・バクル・イブン・ジャッド (一一〇二〜一一九〇年) は、法学の他にハディース学にもすぐれ、また記憶力の良さから「暗唱者 (ḥafz)」と呼ばれていた(イブン・ハルドゥーン自伝1、五八頁、註六八; Manuela Marin, "Abū Bakr Ibn al-ʿAdd y su familia," in Maria Isabel Fierro Bello & Maria Luisa Ávila Navarro ed., *Estudios onomástico-biográficos de al-Andalus*, IX, Madrid: CSIC, 1999, pp. 223-260; J. Lirioa Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 6, pp. 29-34)。なお、ワジーフとは古いアラブの名馬の名である。

- (84) barakatan. 運動の二性質。アリストテレスによれば物体の運動は強制運動と自然運動の二種類に分割される。自然運動とは事物の自然(本性)に従った内発的な

力に基づく運動であり、強制運動とは外発的な力によって、事物の自然(本性)に逆らって行われる運動である(廣松渉ほか編『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、一九九八年、一四〇〜一四二頁)。

- (85) al-ḥanz wa al-ṣaḥī. ハムザとは、アラビア語の二八文字の独立文字に含まれない特別な文字で、声門閉鎖音を現す場合に使用される文字。クルアーン読誦学では、*aḥana* を *amana* と発音するように、母音を伴わないハムザを伸ばして次の子音に続かせることがあり、これを「平滑化 (taṣmīn)」と呼ぶ(堀内勝「QIRA'AH (コーラン)の読誦」に関するノート)『アジア・アフリカ言語文化研究』四、一九七一年、二二二〜二二三頁)。なお、ḥanz には「拍車」という意味もあり、馬に関連するこちらの意味も掛けられていると思われる。

- (86) Abū Sa'īd al-Muhallab ibn Abī Suḥra al-Azdi al-'Aḥakī (六三二頃〜七〇二または七〇三年)。初期イスラーム時代に活躍した武将で多くの詩人に賞賛された。オマーンで生まれ、父とともにバスラに移住した。アラブ・ムスリムによるスイースタン地方やホラーサーン地方の遠征に参加し活躍したほか、ムフタールの乱ではクーファを制圧した功績によりモスル総督に任命された。晩年はホラーサーンの総督に任命され、同地で没した。(Encyclopaedia of Islam, 2nd ed., "al-Muhallab")。ここでは「黄色 (aṣfar)」との掛詞で選ばれた人名である。

- (87) Faḡad. 小熊座β星とγ星を併せて「二つのファルクド星」と呼ぶ。地球の歳差運動により西暦五〇〇年ごろまでは、天の北極近くにあった。中東・地中海世界は日本より緯度が低いため地平線に近い場所に現れる。

- (88) Subḥayl. 竜骨座のα星。全天の一等星の中でシリウスに次いで二番目に明るい恒星。南半球では観測は容易だが、北半球でも緯度の低い中東・地中海世界なら南の地平線に近い場所に現れる。

- (89) Ashḥab. マーリク派法学者で学祖マーリク・イブン・アナスの弟子。「イブン・ハルドゥーン自伝2」、五三頁、註二二五参照。

- (90) ジャーヒリーヤ時代の詩人イムルウルクイスの詩の一節。

- (91) 「〜と」などと訳されるアラビア語の接続詞 wa は、アラビア文字のワーウ一文字で書かれ、時間の前後関係や因果関係などを含意せず、単純に複数の語や文を並列するとき用いられる。ここでは、様々な色の馬を列挙する際にこの接続詞を用いているので、そこには優劣は含意されていないのだということを示している。

- (92) ハディース集は、預言者が「馬の前髪には復活の日まで恵みが結びつけられる」と述べたいくつかの伝承を伝えている(牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成』第三巻、一九一一二〇頁; Ibn al-Kalbi, *Ansab al-Aḥqāb fī al-Jahiriyya wa al-Islām wa akhbār-hā*, ed. Ahmad Zaki, 4th ed., Cairo: Maḥab'at Dar al-Kunūb wa al-

Wahā'iq al-Qawmīya, 2008, p. 9, n. 4)。

- (93) al-Sakb. 預言者ムハンマドが所有した最初の馬として知られる (Ibn al-Kalbi, *Ansab al-khayl*, pp. 5, 133; al-Sājī al-Tajī, *al-Halba fi asma' al-khayl al-mashhūra fi al-Jahīrya wa al-Islām*, ed. Hāim Saīh al-Dāmīn, Beirut: Mu'assasat al-Risāla, 1975, p. 47, f. 191)。

- (94) Zād al-Rakb. すべてのアラブ馬の祖とされる馬。ダビデ王が所有し、ソロモン王がサバの女王ビルキースに与えたとされる馬 (Ibn al-Kalbi, *Ansab al-khayl*, p. 14; al-Sājī al-Tajī, *al-Halba*, pp. 46-47)。

- (95) Ya'sūb. 預言者ムハンマドが所有した馬として知られる (Ibn al-Kalbi, *Ansab al-khayl*, pp. 20, 30, 133; al-Sājī al-Tajī, *al-Halba*, p. 71)。

- (96) 馬名の読み方については、Ibn al-Kalbi, *Ansab al-khayl* al-Sājī al-Tajī, *al-Halba* を参照した。

- (97) 詩人ムタナッビーが保護者であるハムダーン朝君主サイフッダウラを讃えるために詠んだ詩の一部。

- (98) nashikh. 「取り消すもの」の意。タフスイール学(啓典解釈学)、ハディース学、法源学の分野に関わる理論。クルアーンのなかには一見相反する記述が見られ、一方の記述が他方を「取り消した」と解釈することでその矛盾を解決するというナスフ(取り消し)理論が用いられる(「ナスフ」『岩波イスラーム事典』)。

- (99) 『クルアーン』第八章第二二節(日本語訳は井筒訳『コーラン』上巻、二四〇頁)を踏まえた表現。

- (100) aḥīla (単数形 hiḍā)。月齢の最も若い月。月が完全に地球の陰に入って見えなくなる「朔」ではなく、朔の後初めて見える月のことである。アラブやイスラームの暦では夕刻に太陽が沈んだ頃にこの「新月」を目視できた時に各月の初日とする。(Encyclopaedia of Islam, 2nd ed., "Hilāl", "Ta'rikh"; 「新月」『岩波イスラーム辞典』)。ここは、新月の形と蹄鉄の形が似ていることを利用した表現である。

- (101) raḥīq. 見た目がほつそりとした様子や性格が穏やかであるといった意味があるほかに「奴隷」の意味がある。ハフス朝君主アブー・イスハークからナスル朝君主ムハンマド五世への贈り物の中には馬のほか奴隷が含まれていたことを踏まえた掛詞(本訳稿三八頁参照)。

- (102) アンダルス東部の都市バレンシアの文人イブン・アッバール(一一九九―一二六〇)による著名な詩の冒頭部分。一二三八年、バレンシアがキリスト教徒の軍勢に包囲された際、その街の書記イブン・アッバールがチュニスに派遣されてハフス朝初代君主アブー・ザカリヤーに救援を求めた。その際に披瀝されたのがこの詩である。これに応じてチュニスからは大量の食糧がバレンシアに送られたが、すでにバレンシアは陥落しており、また援軍が送られることもなかった

(Ibn al-Khaṭīb, *ʿamal al-a'yan*, pp. 272-273; *al-Iḥār*, vol. 6, pp. 283-284)。なお、(11)で救援を求められているのはムスタンスィルとされているが、通常この君主号で呼ばれるのは、ハフス朝第二代君主ムハンマド(在位一二四九―一二七七年)である。

- (103) nīya. 意図。意図。作為または無作為における意図。とくに、信仰行為における意図またはその表明。イスラーム法では、信仰行為はそれ自体を意図してアッラーのために行わなければならないとして、ニーヤを重要な構成要素とする。ニーヤの表明は、口に出して、または心のなかで行われ、アラビア語以外の言語で言っても有効とされる(「ニーヤ」『岩波イスラーム辞典』)。

- (104) al-ḥawā' al-Rudayniya. 槍作りで知られる女性ルダイナ Rudayna にちなんだ表現。

- (105) alif al-waṣl. 語頭のアルフの文字は、通常は母音で発音されるが、特定の単語では先行の語の最終母音に吸収されて発音されなくなることがある。ここでは、このようなアルフの文法上の性質をつながることの喩えとしている。次に出てくるラームの文字とともに、「友情(ḥiṭā)」という単語に用いられる文字を利用した言葉遊びの表現である。

- (106) この段落は極めて難解である。